巻頭言

情報格差を下支えするのは

作家　　神津　十月

IT革命という言葉がもてはやされているが、このIT革命をほんとうに成功させるには、必ず表面化する「情報格差」をどのように埋めるか……ということにかかっているのではないかと私は思う。

何か大きな変革があれば、そこに当初、ある種の格差が生まれるのは当然のことである。

電化製品一つとっても、それが市場に登場してからしばらくは、持てる者と持たざる者が混在する。だから当然そこには格差が生じるわけだが、その壁が無くならない限り、製品は市民権を得た商品にはなりえない。

したがって企業は、価格、性能、操作の容易性、周辺機器やソフトの開発等々に必死になる。けれどもIT革命というのは、一つの機器や製品の普及という簡単な問題ではないから、ややこしい。

パソコンの家庭への普及は加速度的な高まりをみせているし、携帯電話の出荷台数も目ざましい。製品だけをみればもはや成功というところだが、問題はそれらを使ってどれだけのことができるか……という部分だから、奥が深い。

私もパソコンを扱いはじめてから三年ぐらいになるが、原稿を書き、電子メールで送るという作業だけを取ってみても、ワープロソフトやエディターソフトをあれこれ取り替えるという遍歴を重ね、メールソフトもそれに合わせて替えてきた。だんだん分かるようになると、あれこれ欲求が出てきてもの足らなくなるが、この世界は底知れぬ沼のようで、より良い情報をと求めると不思議なことに、その思いを満たしてくれる情報に出会えるから凄い。

ただ、凄いということは、ITが生む格差も凄いということなのである。三年前の私と今の私では情報量も理解力もまるで違う。仕事の必要性があったからなんとか追いかけてきたが、そうでなかったらとてもとても、今の状態まではやってこられなかったと思うし、この先の道のりというか、沼の深さを考えると暗澹たる思いに駆ら

れることもある。

私などの及びもつかぬ、想像もできぬほどのところにいる人は無数に存在するのである。つまり、格差は無限大なのである。

しかも情報格差は一つのパターンだけではない。途上国と先進国、経済の良し悪し、教育、あるいは地域、年齢、やる気、等々、あらゆる部分で生み出してしまう。すべての人がおしなべて平等にというのは無理だとしても、さまざまな形で生まれてくるであろう「情報格差」をどの程度押さえることができるか……は大変な課題であろう。

通信事業を統括する郵政省には、したがって大きな期待がかかる。インフラ整備は当然として、全国に配置された郵便局を、情報格差解消のためにどれだけ有効活用できるか、日本のIT革命の下支えは郵便局にあると、私は言い切ってもいいのではないかとさえ思っている。

とはいえ、何も突然、町や村の郵便局がハイテク局舎になる必要はない。離島や過疎地にも同じ料金で郵便を届けるのと同じように、ITの格差を受けてしまうような場所や人々のために、きちんとしたフォローアップをするための方法を、まずは考えればいいのである。

運営の困難な地方の公立文化会館などでは、住民に運営に参加してもらい、地域に必要な文化会館のあり方を模索するようになった。

郵便局も、IT革命の時代に郵便局が何をできるか、住民とともに考えて積極的な取り組みを始めるのもいいのではないかと思う。

ますます面白くなるのが「郵便局」。私ははっきりとそう思っている。